

風車

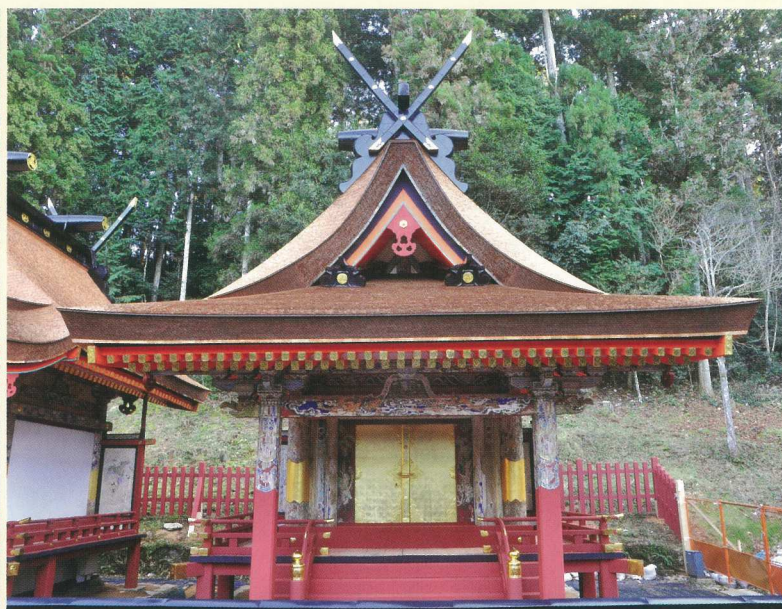
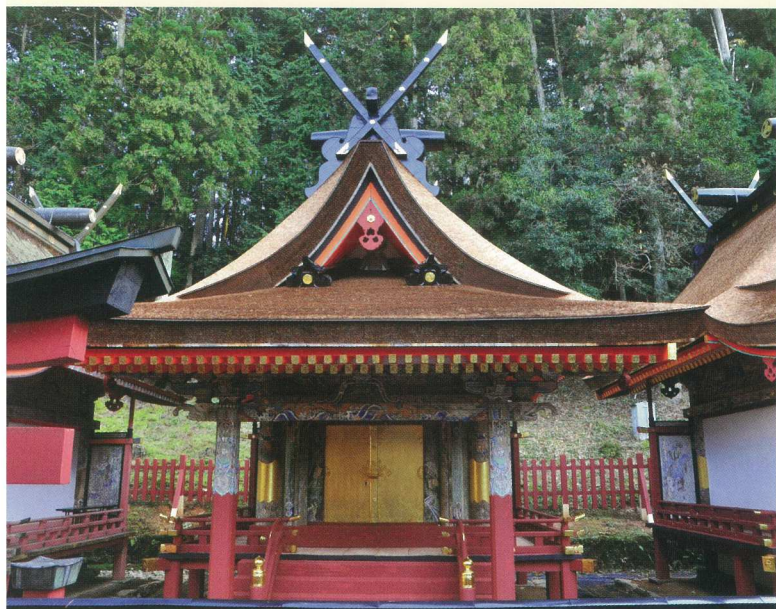
紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2013 冬号

65

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集 重要文化財丹生都比売神社 本殿保存修理工事

— 塗装工事における新発見 —



写真上右 第一殿 (竣工)

写真上左 第二殿 (竣工)

写真下 第一殿から第四殿を見通す

第一殿と第二殿は工事完了、第三殿と第四殿は未施工 (平成 25 年 1 月現在)

特集 重要文化財丹生都比売神社 本殿保存修理工事

— 塗装工事における新発見 —

はじめに

丹生都比売神社本殿（四棟）は、平成二十五年一月から二十四ヶ月の工期で保存修理工事を実施しています。そのなかで、塗装工事を実施する際にとっても大きな発見があったので、その詳細をお知らせします。なお、工事の概要については風車六十三号の新現場紹介に記載しているので、併せてご覧下さい。

塗装の現状

本殿の保存修理工事は昭和五十二年以來、三十六年ぶりとなりました。前回も今回と同様、ひわだ 椴皮の葺き替えと塗装工事が行われています。実は、その時の工事で塗装

の仕様が大きく変更されていたことが、前回の工事に関わられた方の話より判っていました。具体的な箇所を当時の写真で確認してみましよう。

写真1は修理前、写真2は竣工の写真です。木階（正面の階段）や縁板の木口を見ると、修理前は黒色に塗られているのに対して、修理後は黄色になっています。金具が付いているため少し見にくいのですが、垂木の木口も同様が変わっています。また写真には写っていませんが、破風の眉には緑青が塗られていたそうです。そして一番大きな変化といえば、赤色塗料の色味が変わっていること。修理前は赤味が強く、落ち着いた赤色なのに対して、修理後は黄味が強く、鮮やかな赤色になっています。これは、証言や色の雰囲気より、塗料の種類が「弁柄」（もしくは「丹土」）から「鉛丹」に変わっていると想定できました。弁



写真2 昭和52年の修理竣工時



写真1 昭和52年の修理工事前

柄・丹土は酸化鉄が主成分（以降「酸化鉄系塗料」と記す）なのに対して、鉛丹は鉛を主成分としており、この二つは全く異なる塗料と言えます。ちなみに、赤色を呈する塗料にはもう一種類、水銀を主成分とする「朱^{しゆ}」がありますが、非常に貴重で高価なため、建築塗装にはほとんど使われていません。

ところで、前回の修理では何故このような変更が行われたのでしょうか。実は、この時期の文化財修理ではこのような事例が頻繁にみられます。当時は、「木口は黄色」「神社には鉛丹」を用いるという考えが一般的で、そこから外れたものに価値を見出すことは少なかったようです。最近の研究では、かつては建築の塗装に鉛丹を使用す



写真3 修理前の軒廻り塗装状況。垂木木口の金具は取り外した状態

る例はあまりなく、ほとんどが酸化鉄系塗料であったこと、また、鉛丹が神社建築に多用されるようになった背景には、明治時代に建造された鉛丹塗りの平安神宮が、神社のイメージとして人々に定着したから、という意見もあります。

木階や縁板の木口を黒く塗る例はあまり一般的ではないのですが、実は紀の川流域に分布する神社で数例が確認されていることから、この地域の特徴と言えます。また、垂木の木口には金箔押し^{きんぱくおし}の透かし金具が取り付くことから、金具の背景に見える塗装は同系色の黄色よりも黒色の方がより金具を引き立てることを考えると、垂木木口を黒色で塗ることはとても意味のあることと言えます。



写真4 塗装を掻き落とした状態。茅負の上半分と垂木木口に黒色塗装痕跡が見える。

塗装の調査

今回の塗装工事にあたっては、上記の塗装状況について徹底的に調査を行い、修理方針について所有者・有識者・文化庁と我々を含め、様々な議論が交わされました。まず調査ですが、建物に前回修理以前の塗装痕跡が残っていないか、現塗装を掻き落としながら確認していきましました。すると、写真3、4のように、垂木の木口や茅負^{かやおい}には現状の塗装の下に旧塗装の痕跡が残っていました。また、緑青も一部で痕跡を確認出来ました（写真5）。さらに、第二殿では明治三十四年の修理で化粧垂木が小屋組材に転用されていた事も判り、明治以前の赤

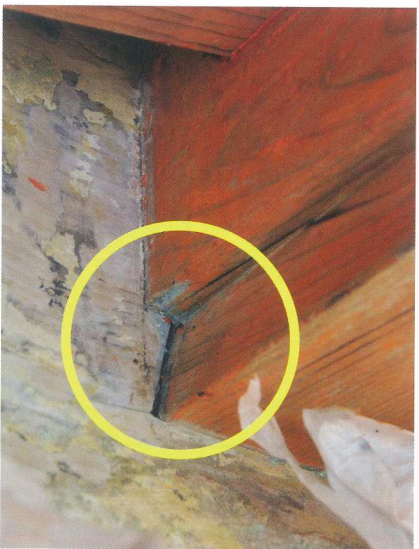


写真5 丸囲み部に緑青（緑色の顔料）が残存する。

新たな発見

このようにして塗装の変遷を明らかにしていったのですが、その過程で思わぬ発見がありました。きっかけは正面の千鳥破風ちどりばふ内側の垂木足元に残る塗料でした（写真8）。普段は隠れている場所で、前回の塗料が塗られていない場所に、灰茶褐色の塗料が残っていたのです。この特徴的な色を見て、この塗料が長年の間に変色した鉛丹と推測しました。また、よく探すと垂木のごく一部に同様の塗装が見つかり、さらに桁や前述の小屋裏に転用された垂木の表面塗装の下に、鉛丹の色と思われる明るい赤色が見えました。早速蛍光X線分析を実施したところ、鉛丹と推測した塗料からは全て

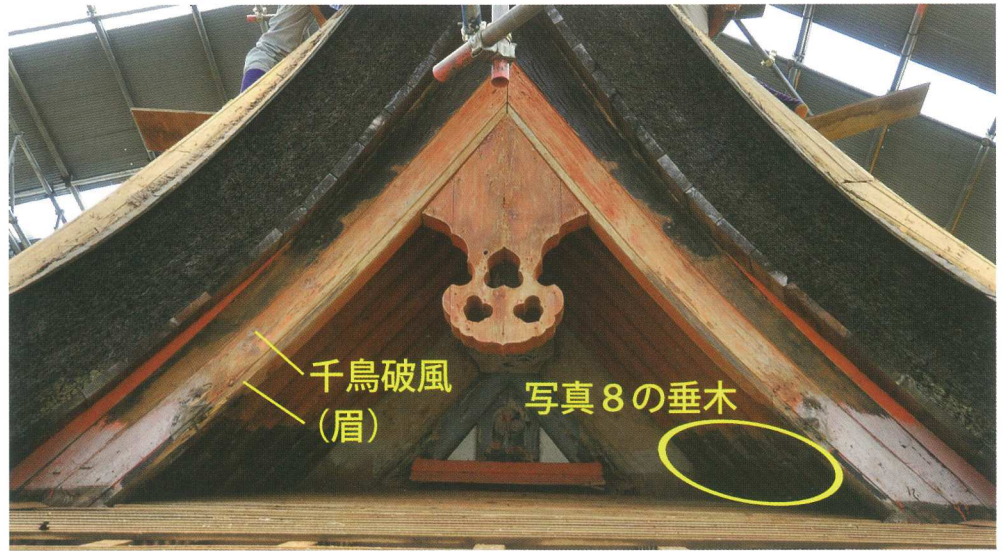


写真6 千鳥破風も茅負と同様に修理前は鉛丹塗りだが、上半分に黒色塗装痕跡あり。



写真7 第二殿の小屋内。
2本の垂木が転用されている。



写真8 変色した鉛丹が残存する。

鉛が検出されました。つまり、かつて鉛丹が塗られていた時期があったことになりました。しかし、いくら探しても桁より下の軸部からは、前回塗装以外に鉛を含む塗料が見つかりません。これらの状況から、軒廻りは鉛丹で、それ以外は酸化鉄系塗料で塗り分けられていた時期があったと想定できました。また、塗り分けは少なくとも第一

色塗装を確認できる貴重な資料となりました（写真7）。

一方で、赤色塗料の種類を判別するため、含有する元素を検出できる蛍光X線分析を行い、科学的な根拠を元に判断しました。

殿が建立された正徳五年（一七一五）当初には行われており、遅くとも明治期には酸化鉄系塗料に統一されたと考えられます。

実例と理由

以上のように、今回の塗装工事に伴う調査によって、江戸期には軒廻りと軸部で赤色塗料を塗り分けていたという、新たな知見を得ることができました。ただ、はたして実際にこのような例があるのか？という疑問が生じます。そこで調べてみたところ、県内では海南市の藤白神社本殿に同様の塗り分けが施されているほか、浅草寺の二天門は軒廻りを鉛丹、軸部を赤漆に塗り分けていたことが近年の修理工事で判明しており、多数とはいかないまでも数例が確認できました。つまり、現実には軒廻りと軸部で異なる塗料を塗り分ける例は確かに存在しており、在り得ないことではないのです。

次に、何故赤色塗装を二色で塗り分けるのか？という疑問が生じます。これに対する明確な答えはないのですが、考察する手

掛かりとして塗料の性質が挙げられます。鉛丹の主原料となる四酸化三鉛は自然界では不安定な物質で、日光や空気中の水分の影響を受けて変質（塗料は白化・黒化）し易い一方、酸化鉄（酸化第二鉄）は非常に安定的な物質で変色し難いのです。これが、かつては鉛丹でなく酸化鉄系塗料が建築塗装で主に用いられてきた理由と考えられています。そして、軒廻りは直射日光に当たりにくく、地面から一定の距離があり湿度も安定しているため、比較的変色が起こりにくいことを考えると、軒廻りに鉛丹を用いることは非常に理に適っているのです。

まとめ

前回修理での変更は丹生都比売神社における固有の歴史を継承したものではありません。そのため、本来の塗装に戻すことを今回の修理方針としました。また、調査により解明した塗り分けの実態は、全国的にも稀少な事例であり、神社にとってもより古式で元来の仕様と捉え、実際の施工ではこれらの成果を反映

した塗装を実施することになりました。調査を始めた段階では、まさかこの様な成果が出るとは思いませんでしたが、今回の発見を通じて故きを温ねる重要性を切に実感しました。（結城啓司）

写真9 竣工した第一殿





武家屋敷跡の発掘調査

埋蔵文化財課では、平成二十五年八月より、和歌山市二番丁に所在する和歌山城跡の発掘調査を行っています。調査区は、かつての和歌山城三の丸にあたり、江戸時代に上級・中級藩士の武家屋敷が立ち並んでいたところですが、残念ながら、後世の整地などの影響で、今回の調査では建物跡は発見できませんでしたが、武家屋敷での生活

を垣間見ることのできる遺構が発見されていますので、ご紹介します。

第一遺構面（十九世紀以降）では、柱穴列・水琴窟・和歌山天空襲時の焼土層等が発見されました。

その中でも2ヶ所で発見された水琴窟（写真1）は珍しいものです。和歌山城下では、二の丸御殿跡と鷲の森遺跡で発見されているだけで、武家の生活を考えるうえで貴重な資料です。

第二遺構面（十八世紀後半）では、礎石建物跡・石組遺構・土塀基礎・通路状遺構・苑池状遺構等が発見されました。

調査区の中央部分で発見された土塀基礎（写真2）は、延長上にある和歌山地方裁判所の敷地内でも同じものが発見されており、二番丁の屋敷地を東西に分割する土塀の基礎と考えられます。この土塀は、幕末には解体され、埋められていたことがわかりました。十八世紀の絵図では、東西に分割されていた屋敷地が、幕末の絵図では合併され



写真2 土塀基礎

大ぶりの石を3列に並べた南北に延びる石列です。幅1.4mを測り、真中に並ぶ石は礎石に使用するような平らな石を使用していることから、中心に柱を持った大きな土塀であったのでしょう。絵図の記述から佐野家と安藤家の敷地境界と考えられます。

て一つになっていた様子が描かれており今回の発掘調査で絵図史料の記述を裏付けることができたことは、大きな成果といえます。

また、遺物として、多くの陶磁器・瓦とともに土人形や古銭などが出土しており、これから、遺構と併せて考えていくことで、当時の生活を解明できることが期待できます。今後の調査成果にご期待ください。

（高橋智也）



写真1 水琴窟

水琴窟は、底に穴を開けた甕を逆さに埋め、手水鉢（ちょうずばち）から甕の中にできた水溜りに水が落ちた音の反響を楽しむ施設です。

今回の調査で発見された2つの水琴窟は、丹波地域で作られたと思われる鉢や堺焼のすり鉢を使用していました。

古建築修理の逸話 ⑦

半蔀

絢爛な源氏物語において、どこか柔和な雰囲気漂う夕顔の君は、光源氏のみならずあまたの読者に愛されてきました。その一節を題材とした能楽『半蔀』において、「夕顔の草の半蔀押し上げて」との謡に合わせて姿を現す様は、無上の美しさと讃えられます。

半蔀は、今でも一般的な引き戸や開き戸とは異なり、上にはね上げて開ける窓の形式です。高野山の国宝金剛峯寺不動堂は、檜皮で葺かれた美しい屋根に加え、正面の大きな蔀がその雰囲気に優美な威厳を添えます。軒から下がる金具で水平に吊り込まれた蔀の佇まいは、建物の内外がたおやかにつながる日本の伝統的な空間を象徴するかのようです。絵巻物などでも貴族の館などに見出すことができ、非常に格式の高い建具でもあったようです。平成二四年に修理が完成した重要文化財金剛三昧院客殿においても、大広間正面に蔀が配されます。今回の修理に伴う調査では、建立当初は蔀ではなく舞良戸という引き違い戸が入れられていたことがわかりました。金剛三昧院の住職が高野山内の要職についた機会などに、より高い格式のものに改めたようです。

しかし鴨居と敷居にしっかりと含まれた引き戸や、いかめしい開き戸と異なり、華奢な金具で吊り込まれる蔀はどこか不安定な印象で、開け閉めも大変です。

『半蔀』で蔓草が絡まる鄙びた風情、そして一夜で萎れる儂くも可憐な白い夕顔の花。日本人が尊ぶのは、このように麗げな繊細さなのかもしれません。



金剛三昧院の蔀

(多井 忠嗣)

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

去年（平成25年）の秋も深まった頃、たしか11月の末だったと思いますが群馬県渋川市にある金井東裏遺跡で甲冑を着けたままの武人が発掘調査で見つかったとのニュースがずいぶん話題になりました。まだ報告書が刊行されておらず、その詳細についてはよくわかりませんが、記事によれば六世紀初頭の榛名山の噴火による火砕流で一気に埋まったものと。甲冑そのものは古墳の副葬品といったかたちでずいぶん多く見つっていますが、着装したままの姿でというのははじめてのことだけに衝撃的でしたね。

こうした自然災害で一気に埋まり、当時の状況をそのままに伝える遺跡としては、イタリアのナポリ近郊にあるポンペイ遺跡が有名ですね。これは西暦79年（弥生時代中期）にヴェスヴィオ山の大噴火で埋まったものですが、18世紀半ばから発掘調査がはじまり、これまで色鮮やかな壁画が多く発見されたり、遺体が腐食して空洞となったところに石膏を流し込む手法で、襲いかかる火砕流からわが子を守ろうとした母親の姿やもだえ苦しむ犬の様子などを再現するのにも成功しています。

日本ではかなり時代が新しくなりますが、江戸時代の天明三年（二七八三）、浅間山の大噴火によって一気に埋没した鎌原遺跡（群馬県嬭恋村）があります。村人五七〇名のうち四七七名が亡くなるという大惨事ですが、昭和54年からはじまった発掘調査では、高台にある観音堂まで避難しようとしてあと数十段というところで息絶えた二人の女性が見つかるなど当時の緊迫した状況が確認されました。

こうした当時の状況がそのままわかる資料と言うのはきわめてめづらしいし、その分貴重ともいえますね。それにしても坂東武者の祖形ともいえるかの武人は、自然の猛威に臆することなく、最期まであきらめずに勇敢に立ち向かっていったのだと思いますよ。うん。なにしろカブトは脱いでなかった——。

(村田 弘)

発掘屋余話 ⑳ 災害遺跡

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2013年冬～2014年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬季企画展「馬」 2013年12月21日(土)～2月9日(日)
- 春季企画展「岩橋千塚発掘50年」 2014年3月1日(土)～6月15日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展 文化財の「ことば」と「なまえ」
2014年1月25日(土)～3月2日(日)
- 企画展 新収蔵品展
2014年3月8日(土)～4月20日(日)

和歌山市立博物館

- 特別陳列「歴史を語る道具たち」 2014年1月15日(水)～3月2日(日)

高野山霊宝館

- 冬季平常展「密教の美術」(前期) 2013年12月21日(土)～2014年2月23日(日)
- (後期) 2014年2月24日(月)～4月20日(日)

(公財)和歌山県文化財センター

- 「シンポジウム 紀ノ川北岸の古墳文化」 2014年2月1日(土)
きのくに志学館 講義・研修室(和歌山県立図書館2F) 13:00～

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 写真上右 第一殿(竣工) / 写真上左 第二殿(竣工) / 写真下 第一殿から第四殿を見通す
- 2 特集 重要文化財丹生都比売神社本殿保存修理工事
- 6 埋蔵文化財課短信
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話 ⑦ 半部」
「発掘屋余話 ② 災害遺跡」
- 8 催し物案内

風車65 (2013・冬号)

平成26年1月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8404 和歌山市湊571-1

TEL 073-433-3843 FAX 073-425-4595
maizou-1@wabunse.or.jp